　　　　観心三界抄

　　　　　　　　　　　　　上野　博隆

　　　　　　　　　２０１９年３月１８日

　日蓮大聖人の仏法に則って元初の南無妙法蓮華経を説く。

　はじめに、法華経にある三界について。

　法華経に「如来如実知見」「三界之相」「無有生死」「若退若出」「亦無在世」「及滅度者」「非実非虚」「非如非異」「不如三界」「見於三界」「如斯之事」「如来明見」「無有錯謬」とある。

　直訳すると、①「如来のかくの如く実際の知る見意識は」②「三界のこの相」③「生死が有ることが無い」④「あるいは退き、あるいは出る」⑤「また、釈迦の在世では無く」⑥「および、釈迦が滅した後の者」⑦「実に非ず、虚像に非ず」⑧「かくの如くに非ず、異なることに非ず」⑨「三界は、かくの如くでない」⑩「今、三界を見た」⑪「かくありの事の如く」⑫「如来の明らかな見識は」⑬「錯覚して誤ることが有ることがない」となります。

日蓮大聖人は、御義口伝下（七五三ぺーじ）に「如来とは、三界の衆生なり此の衆生を寿量品の眼開けてみれば十界本有と実の如く知見せり」とある。

　仏法で言う三界とは、「欲界」「色界」「無色界」のことである。十界で言うと六道の凡夫の住所を指す。六道とは、「地獄界」「餓鬼界」「畜生界」「修羅界」「人界」「天界」です。

しかし、ここで言う三界とは、⑨⑩の通り十界互具漏れることなく全部のことです。本有とは、南無妙法蓮華経です。私は、その時代により三界の明見は同じようで異なると感じました。

　直訳を日蓮大聖人の仏法に当てはめて説くと②は、生命の相。生命が永遠であることを説く。③十界の相を説く。⑫とは、当体義抄（五一二ページ）に「正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱える人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一身に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居所居・身土・色心・俱体俱用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子旦那等の中の事なり是れ即ち法華の当体・自在神力の顕わす所の功能なり敢て之を疑う可からず之を疑う可からず」と述べている。すなわち三大秘宝の御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えるものは、大御本尊の仏界と題目を唱える人の九界とが、境智冥合して、十界互具・一念三千の当体蓮華を証得することができるのである。これが如来（日蓮大聖人）の明らかな見識である。

　それを踏まえて、元初の三界を説く。

　まず、三種の主について、

「三界の主」とは、仏のことである。「三界の主神」とは、色界に住む大梵天王のことである。「三界の中、欲界の第六天の主」とは、第六天の魔王である。元初の三界を、三種のあるじの名をとり、仏界、神界、魔界とする。十界を身に約してこの元初の三界と人界とする。なぜ、この三界を用いるかと言うと、この現世では、この三界が悪に作用するとき社会のあらゆる問題を起こす原因になっている。私は、この三界が重要であると①のごとく実智見するのである。三界は、世の中の変化によって本有は同じでも相が異なるものである。これが⑨⑩の私の明見です。次に詳しく述べる。

元初の三界は、菩薩界所具である。

御書に「菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を軽んじ他人を重んじ悪を以て己に向け善を以て他に与えんと念（おも）う者有り、仏此の人の為に諸の大乗経に於て菩薩戒を説き給えり」十法界明因果抄（四三三頁）

つまり、化他行と善を行ずるのが、菩薩界であると観ずる。元初の三界に約して説くと、菩薩界所具の仏界とは「身近な人のみを重く愛する愛情片ではなく」「他に愛を広げていく」慈愛です。菩薩界所具の神界とは「自分のみの幸福を求め他を支配するのではなく」「他を導き支える」ことです。菩薩界所具の魔界とは「自身の欲望に負け欲望に身を任せるのではなく」「欲望に負けずに、善へ欲望を向けていく」ことです。これが、菩薩界所具の元初の三界です。つまり、この心を元初では「南無妙法蓮華経」と名付ける。そして、この心は、全宇宙の始まるときに既にあった心です。故に全てのもの・人・神仏はこの心を持っている。よって、元初の南無妙法蓮華経を聞く、または自身で唱えれば、「元初の三界が自身の身にあることを悟り、それを発露とする行動は善と一致する。そして心と行動は、一常であり、全ての神仏をも悟らせ活かす法です。」と言うことが私の明見です。

「籠の外の鳥鳴けば、籠の中の鳥、籠から出ようと欲す。」如くである。

次に、「教、機、時、国、教法流布の先後」により法が正しいことを説く。

　　　　　教を説く。

教義を五重相対して優劣を比較する。

内外相対、大小相対、権実相対、本迹相対、種脱相対。南無妙法蓮華経の熟益。を説明する。

当然、元初の南無妙法蓮華経も法華経である。しかし、読み替える点がある。それについて説明する。

　「読経」元初では、経を次の様に読み替える。

　　妙法蓮華経。方便品。第二。

　止舎利弗。不須復説。我心本妙。所以者何。

（解説）

　　我の心の本当の不思議を顕わす。

　三回目の如是本末究竟等。所謂。南無妙法蓮華経。

（解説）

　　諸法実相のかくの如き最初から終わりまで一貫して変わらなくあるものは、元初の南無妙法蓮華経であると言うことを宣言する。

　　妙法蓮華経。如来寿量品。第十六。

　我本行菩薩道。→我本行大善道。

（解説）

　　我の本行は、大いなる善行を行うことであることを明かす。菩薩行と大善行とどちらが上かをよくよく考えるべきなり。

　　自我偈。

　慧光照無量。寿命無量劫。

（解説）

　　寿命が無量なのは、無量寿仏の力を示すためなり。これは、阿弥陀仏が法華経に帰依した証です。

　以何令衆生。在神魔佛人。善一致。得入無上道。速成就善身。

（解説）

　　身に神、仏、魔者の心が有ることを明かし、善と一致させることを明らかにする。

　そして、速やかに善を熟した身を成すことを明かす。

よって、末法の南無妙法蓮華経の熟益であることを明らかにする。

キリスト教、イスラム教の教えの本位を述べる。聖書、コーランには、信仰する人の菩薩界の行を行う心と具体的な行いが説かれている。当然、菩薩界所具の神界の行が説かれている。つまり、内道、大乗経、南無妙法蓮華経の熟益である。（但し、心の名を南無妙法蓮華経と認めればです。）

機を説く。

「南無妙法蓮華経」は、宇宙の始まりにあった心の名前である。つまり一切の衆生は既に縁をして、既に信じている。ただ、涌出するのみの機根である。阿弥陀仏の血縁の者。キリスト教の血縁の者。イスラム教の血縁の者。神道に血縁がある者。

　　　　　時を説く。

機感相応の時。末法の終わりを感じ、元初の南無妙法蓮華経を説いた。

一切法、神仏の力が復活する時である。

　　　　　国を説く。

仏法は、必ず国に依って弘むべし国には寒国・熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向偸盗国（ちゅうとうこく）・一向殺生国・一向不孝国等之れ有り。

ご本尊を国で約す。大国は、釈迦牟尼仏。小国は、天王如来。この御本尊に祈れば、自然災害は無くなる。阿修羅の道を脱する。六道輪廻の国を脱する。

「又一向小乗の国・一向大乗の国・大小兼学の国も之有り、而るに日本国は一向に小乗の国か一向に大乗の国か大小兼学の国なるか能く之を勘うべし」

キリスト教の国あり。イスラム教の国あり。この心は、神道の国、全ての国に広まるべき瑞相なり。

　　　　　教法流布の先後。

元初は「南無妙法蓮華経」の熟益の時である。

「衆生既信伏」「湧出仏法」である。理が響き渡れば、次は善の実践。社会変革の時である。

　次に本尊について。

本尊は、法報応の三身を具足するなり。

我が本尊は、光と影なり。法身は、各世尊を奉るなり。今、総閻浮提総与の本尊をしたため、全ての世尊の光と影と成す。世尊一身の本尊である。

　本尊には、全宇宙の実相を有るべきなり。よって、三界の王と自然（有情、非情）を尊ぶ心を記載する。無とは、元初の南無妙法蓮華経。つまり、三界の王の善に作用する心（精神）以外に無いのである。「南無」は心の名前であることを示す。これは、私も認め、全ての世尊も受持することを認めていることである。

十二の不思議を用いて証とする。

・像（仏・菩薩・神）の心を洗う。  
・海を洗う。（修羅）  
・山を洗う。（地獄・餓鬼・畜生）  
・（輪王・人・帝釈）の病魔を洗う。  
・梵天の心を洗う。  
・宇宙（月・太陽・大気）を洗う。  
・縁（リレーション）同体を結ぶ。  
・神通力（声聞）声を聞く。  
・経（経典、聖書、コーラン）の力が蘇る。

・無情の命を仏に帰依せしめる。

・体宇宙の本尊を顕す。

・虚空会の儀式を行う。

　この事をもって実証と成す。どうか見守り候のこと宜しくお願いします。

　　　　　　　　　　　　　以上。

　　　　　　　第三版

　　　　　　　　２０２０年１月２９日

　補足資料

夫れ木をうえ候には、大風吹き候へどもつよきすけをかいひぬればたうれず。本より生いて候木なれども、根の弱きはたうれぬ。甲斐無き者なれども、たすくる者強ければたうれず。すこし健の者も独なれば悪しきみちにはたうれぬ。（三三蔵祈雨事一四六八・一）

御義口伝（七五三ページ）

如来とは、三界の衆生なり。此の衆生を寿量品の眼開けてみれば十界本有と実の如く知見せり三界之相とは生老病死なり本有の生死とみれば無有生死なり。生死無ければ退出も無し。唯生死無きに非ざるなり。生死を見て厭離するを迷と云い、始覚と云うなり。さて本有の生死と知見するを悟と云い、本覚と云うなり。今日蓮等の類、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、本有の生死、本有の退出と開覚するなり。又云く、無も有も生も死も若退も若出も在世も滅後も悉く皆本有在住の振舞なり。無とは法界同時に妙法蓮華経の振舞より外は無きなり。有とは地獄は地獄の有りの儘十界本有の妙法の全体なり。生とは妙法の生なれば隨縁なり。死とは寿量の死なれば法界同時に真如なり。若退の故に滅後なり。若出の故に在世なり。されば無死退滅は空なり。有生出在は仮なり。如来如実は中道なり。無死退滅は無作の報身なり。有生出在は無作の応身なり。如来如実は無作の法身なり。此の三身は我が一身なり。「一身即三身なるを名づけて秘と為し」とは是なり。「三身即一身なるを名づけて蜜と為す」も此の意なり。然らば無作の三身の当体の蓮華の仏とは、日蓮が弟子旦那等なり。南無妙法蓮華経の宝号を持ち奉る故なり云云。

　　　　　　　　　　　　　　以上